

刷毛目、繪三島、彫三島、黒釉、白磁ありその年代は刻銘の研究より正に李朝初期恐らく太宗以後のものならんことを思ふに朝鮮陶磁史は新羅焼に於て堅實なる基礎を固め高麗焼に於て華麗なる花を開き李朝初期に至つて最後の光輝を放つものであり人或はこの最後の光輝を以て朝鮮陶磁史全體を光被する價値ありきとするものもある、而して鷄龍山の遺物は正にその時期を代表すといふも過言ではない。然らば本報告が朝鮮陶磁史研究家に於ていかなる價値を有するかは言はずして明かであらう。數十葉の實測圖。コロタイプ圖版等は最多くこの目的を助けて居る。なほ附録として現在朝鮮に行はる、各種陶窯の構造を説いてあるのも遺跡の理解によき參考となるであらう。(四六倍判、本文五一頁、挿繪三十四葉、圖版八十一枚、朝鮮總督府發行、非賣品)(肥後)

▲義公史蹟行脚

弓野國之介著

著者は郷土史研究の熱心家で、昨年徳川光圀生誕三百年記念會が舉行されるに當り、此の偉人を景仰する一念から親しく彼の史蹟を巡歴し、其の調査し見聞するところを、

ろを、いはらき新聞紙上に百餘回に亙り連載したが、今回それを増訂の上單行本として世に出だされたのが本書である。光圀の足蹟を印せる範圍は概ね水戸領内に留まり、領外では小川、潮來より房總半島を横斷して海路三浦半島に上陸し、鎌倉より藤澤まで行つた事、其他では笠間、筑波、日光、小金等が主なる所であつて、著者は是等の史蹟及び光圀の足蹟は無いが湊川楠公碑や多賀城碑の如きまでをも尋ね、其他牧畜植林等の事業、孝子節婦表彰の蹟等に就ても出来るだけ探究し、之に當時の史實を附して彼の偉業を顯彰するに努めてある。記述の體は引用文の原漢文なるを和文になほしてあるのもある位の通俗を主として、行脚的紀行文を加味して興趣多く書かれてあつて、讀者は本書により此の偉人を更に景仰する念を起すべく、國民思想の善導に資するところが尠くならう。(四六版四二二頁、水戸弓野氏發行、價三圓)